

て温泉有り、至ての熱湯にて、湯壺より流れ出る湯川々へ落て、湯氣の立上る事烟のごとし、すべ  
て津輕の地には、温泉あまたにして、別て岩城山の麓に多く、何れも上方中國筋の如く、功能のあ  
る湯にはあらず、

出羽國  
上ノ山温泉

〔東遊雜記六〕上ノ山、此所は御城主松平山城守侯三万石、市中大概の所なれども、皆々草葦板家根  
にて見苦敷町の中に温泉あり、湯涌所は町の西にありて、夫を筧を以て家々へ取て、湯壺に入て  
入湯する事なり、熱湯にて臭氣もなく、さして功有湯にはあらず、疝癩によしと云、

〔東國旅行談二〕上之山之温泉

同國羽<sup>出</sup>上の山宿の温泉は、後の御城山より涌いづるといふ、此所のは、たごやの中村喜兵衛と  
いふ内に湯治場と名づけて、石にて築たて、三間に貳間ばかりの湯溜あり、尤座敷奇麗にしてよ  
き宿なり、諸病よきとて、湯に入る人多くあり、旅人は晝はたご錢を出し、滯留して湯治するも見  
ゆ、また表のかたに屋根をまつらひ、五間に貳間餘の湯ぶねありて、往來の人の勝手次第に入湯  
して行と見へたり、此宿の入口は、坂にて家作いづれもかけ造にして、茶屋五七軒もあり、風景よ  
き所なり、東の方はるかに大山みゆる、

〔東遊雜記六〕吾妻が嶽の北方、羽州分に高湯と稱せる温泉あり、到ての熱湯なり、此湯中へ諸の木  
を入置ば、五六年の間には化して石となる、又熱海中に蟲を生ず、土人湯の蟲と稱す、湯上を走り  
めぐる、此蟲を取て服すれば、癩氣治せる妙藥なり、夏の内入湯のもの多し、湯に水を汲入て入る  
事と云々、

〔翹楚篇〕人のやまひをいたましみおぼしめし、御手當の下る事は舉てかぞへがたし、其二三事を  
舉て、其餘は推て知べし、何年の頃にや、御手水番坂二郎右衛門勤仕かゝる程にはあらねども、何  
とか色さめ氣鬱して、虚勞の症にも成なんかとみへし程の事あり、是等の病は旅出に氣を慰め

高湯温泉